

重労働： 山を削る

宗太夫坑の金は、石英を多く含む硬い岩から採掘された。鉱夫たちはハンマーとノミを使って鉱石を掘り出したが、これは非常に時間のかかる作業だった。二人一組で 8 時間掘っても約 10 センチしか進まず、ノミは 2 日間で交換しなければならなかった。

道具は、鉱山の外に配置された鍛冶屋によって研ぎ直された。彼らは、ノミを固定するためのペンチなど、他の道具の製作や修理も行った。新しい道具を作り、古い道具をメンテナンスするのは終わりのない仕事であり、鍛冶屋の作業場に供給するために本土から大量の鉄が輸入された。

測量と計画

佐渡奉行所の役人たちは、測量とトンネル掘削の計画を行った。山師（ヤマシ）と呼ばれる探鉱者が金鉱脈を探し出し、高度な訓練を受けた技術者が坑道の設計を行った。良く計画された坑道には、採鉱、換気、排水のための坑道が含まれる。

佐渡の鉱山で使われていた道具や計算技術の多くは、今日の鉱山測量技師にとっても馴染み深いものだろう。佐渡で働く測量技師たちは、オランダ商人によって導入されたヨーロッパの最新の方法を使用していた。1690 年代、高名な測量家であった静野与右衛門は、南沢排水坑道を建設する際、オランダから学んだ技術を用いたと言われている。全長 1 キロメートルに及ぶトンネルは、3 つのセ

クションに分かれて同時に掘られたが、彼の計画は非常に精密で、セクションを繋ぎ合わせるとほぼ完璧に並んだ。

やわらぎ：山をやわらかくする

探鉱者たちは有望な金脈を見つけると、採掘を始める前にやわらぎと呼ばれる儀式を行った。山の神に岩をやわらかくするように、また鉱山労働者の安全を守るように祈りを捧げた。大山祇神社では、毎年7月の例大祭の初日に「やわらぎ」の神事が行われる。

壇上の中央の人物が着ている黄土色の衣装を飾るムカデに注目してほしい。ムカデは山の神の使いとされ、鉱夫たちには吉兆とされていた。ムカデの形が金や銀の鉱脈に似ているからかもしれない。ムカデは、その多くの足（アシ）と俗語のお金（アシ）との関連から、財運をもたらす象徴的存在でもあった。

展示室 1

佐渡金山で採掘された金のほとんどは貨幣になった。この部屋のジオラマは、金がどのように採掘され、選鉱され、製錬・精錬、製造され、小判と呼ばれる楕円形の貨幣に製造されたかを示している。完成した貨幣は現在の東京まで、海と陸を11日間かけて運ばれた。そこから全国に流通した。

第 2 展示室

博物館の第 2 展示室には、金銀鉱脈の模型と数種類の貨幣の複製が展示されている。作られた年代によっても異なるが、小判には 10 グラムから 15 グラムの金が含まれており、2 トンから 3 トンの金鉱石が必要だった。1700 年代半ばの記録によれば、小判 1 枚で木工職人 23 人を 1 日雇うことができたという。今日、この小判は 1 枚で約 1,000 米ドルの価値もある。

佐渡では 1622 年から 1819 年まで貨幣が製造されていた。展示室の後方には、「佐渡」の 2 つの漢字のうちの最初の漢字が記されたオリジナルの小判がある。

近代の採掘：道遊坑

道遊坑は、1899 年に開削された。手作業で掘られた古い宗太夫坑とは異なり、この坑道は発破によって掘られた。鉱山の年代を知る手がかりのひとつは、壁のあちこちにある円筒形の穴である。これは、ダイナマイトを入れるために開けられたものだ。

1896 年に三菱合資会社（現在の三菱商事）が政府から佐渡金山を払い下げられ、その 3 年後に最初の道遊坑が完成した。人が一人通れるか通れないかの幅で、傾斜をつけながら山の中を縫うように走る古いトンネルとは著しく異なり、新しい道遊トンネルは広くて平らであるため、大量の鉱石を一度に運搬する、近代的な、レールに乗った鉱車が通ることができる。

酒蔵

坑道内の気温は年間を通して10度と肌寒く、酒を貯蔵するには最適の環境だ。今日でも、佐渡の日本酒や焼酎の生産者の中には、ここで数年間熟成させて出荷している。坑道がまだ現役だった頃、坑夫たちは勤務の合間に食べる冷たくて甘いおやつとして、坑内にスイカを貯蔵していたと言われている。